1．平尾山１号墳－石上町

Ⅰ　はじめに

当調査地は、昭和61年に平尾山２号墳として発掘を行った古墳の東南部にある古墳である。天理市水道ガス局では、ちょうど１号墳の南にある水道タンクと同程度の容量をもつタンクの新設が計画された。

しかし当該地は、奈良県遺跡地図８Ｄ－150として記載された古墳であるため、工事に先立つ調査が必要であり、工事予定地の全面発掘を行うことが協議された。

調査前の古墳の状況は、かって果樹園として利用されていたため、墳丘は若干残存しているもののかなり荒れた状態である。また墳丘中央部には、大きな盗掘孔が開いている。埴輪片もいくつか採集できる状態である。

調査は平成７年６月30日から10月23日にかけて実施した。調査面積は2800m²である。

Ⅱ　周辺の歴史的環境

昭和61年に調査を実施した２号墳は同一尾根の先端部に立地している。調査時は、墳丘はすでに消滅しており、現状からただちに横穴式石室が検出された。石室開口方向は岩屋谷を向いている。　出土遺物は須恵器と土師器が玄室の奥壁部から現位置を保った状態で出土した。この他、金属製品では金環や馬具類が出土し、この古墳の築造時期は６世紀の中葉から後半にかけての時

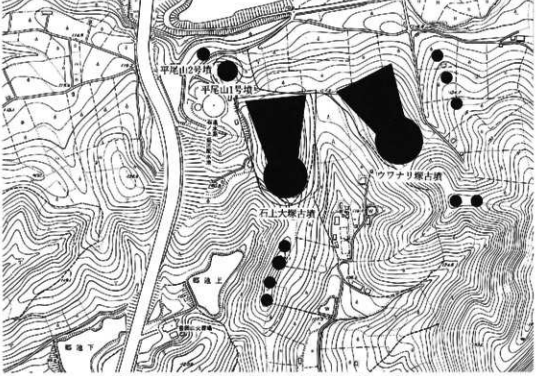


図54　平尾山１号墳と周辺の古墳分布図（S＝$\frac{1}{5000}$）

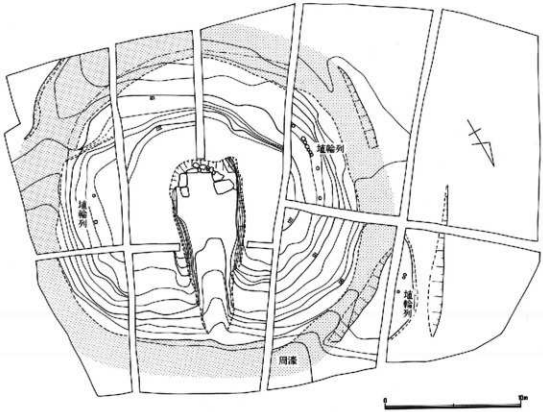


図55　平尾山1号墳遺構検出状況

期に比定される。しかし2号墳からは埴輪は出土していない。

また1号墳の南東部には、石上大塚古墳とウワナリ塚古墳というふたつの大型前方後円墳が2基並列し独特の景観を見せている。さらにこの東側は石上・豊田古墳群が広がる地域である。

Ⅲ　調査の概要

墳丘の現状は、東西22m、南北18mの円墳状を呈していて、西側は平坦な部分があり前方部とも予想された。しかし果樹園の支柱などが残っていて、墳丘も激しく改変を受けていることが十分考えられた。

このため古墳の周辺から調査区を設定して、墳丘の現状を把握することとし、その後石室の調査を行う方法を採用した。

墳　丘　先ず墳形は西側について前方部の可能性はない。そして墳丘の周囲の濠跡を検出したことにより、墳形は円墳であることが明らかになった。復元規模は直径約23m、墳丘高2mあり、濠跡は幅約6mである。濠は全体を回っているものと考えられるが、東南部と西側で検出できたに過ぎない。

墳丘裾部は西側で基底石と2段目の石が残っている。また墳丘の東西と西側の外堤部にも円筒埴輪が樹立していた。

石　室　岩屋谷をのぞむ北側に開口した横穴式石室を検出した。ただ石材をほとんど持ち出し

ており、奥壁と玄室の一部を残しているだけである。

石室墓壙は東西6.5m、南北13.3mの規模である。しかし現存している石室は、玄室の奥の両側壁と奥壁の２段分のみである。このほかの石材は完全に持ち去られており、盗掘の激しさを物語っている。奥壁と側壁の石材は一辺が１m内外にそろっていて、しかも表面の加工はないものの平坦面を揃えるように構築されている。

この点は平尾山２号墳の石室の構築方法と共通している。

玄室の幅は1.8m、残存長1.6mで２石分である。壁は２段分が残り、高さは約1.8m、持ち送りの状況はほとんど見られない。奥壁は２石で構成され、幅は1.8m、高さ1.55mである。天井まではあと２石程と考えられる。

現状での石室の復元を考えると、右側（東側）の片袖式石室であり、全長６～７m程度のものであろう。

さらにこの石室の特徴は、複雑に構成された排水溝である。中央部には奥壁下部から延びる長さ7.9mの溝に、左右から葉脈のように５本の溝がくっついている。溝の幅は40～50cm、深さ15cm程度である。素掘溝には礫石によって側壁と蓋石が組まれていないのである。しかし残念ながら盗掘はこの部分まで及んでおり、完全には残っていない。

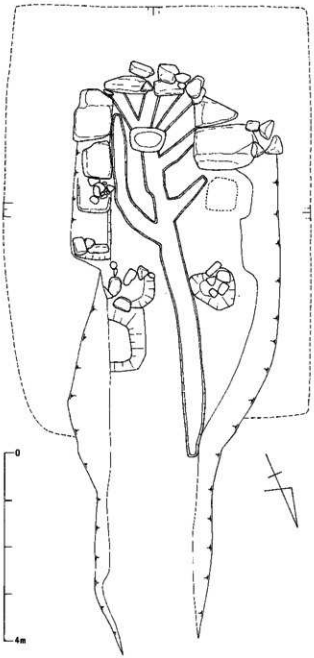


図56　平尾山1号墳石室平面図（S=$\frac{1}{80}$）

Ⅳ　出土遺物の概要

遺物が原位置を保って出土したものはなく、また遺物そのものも完形品はまったくないと言う状況である。一部は排水溝から埴輪片が出土すると言うありさまである。しかし墳丘部では東側で２本、西側では９本の円筒埴輪が樹立した状況で出土し、さらに西側の、墳丘外堤上にも２本の埴輪が樹立していた。

出土遺物は埴輪（円筒、家、盾、鶏）、須恵器、杯、高杯、壺、甕などがあり、玉類はガラス玉17、水晶玉２、鉄製品には馬具の引手、帯飾り金具18があり、また挂甲の小札約200、鉄鏃約20などが出土した。特に小札は横穴式石室からの出土例は少なく、石上・豊田古墳群からの出土は初めてである。

Ⅴ　まとめ

平尾山１号墳は破壊の激しい古墳であったにも関わらず、副葬品は種類が豊富である。古墳の築造時期は出土した須恵器や石室の特徴から６世紀中頃と推定される。

墳丘の規模は直径約23mと推定されるが、これまで調査された石上・豊田古墳群の中では最も規模の大きい古墳である。しかも埴輪の出土した例は石上大塚古墳とウワナリ塚古墳以外はなく、この点では円筒埴輪を始めとして各種の形象埴輪をもつのは注目される。

2．在原遺跡（第５次）－石上町

Ⅰ　はじめに

在原遺跡は天理市北部の石上町一帯に所在する古墳前期、奈良・平安～中世の各時期の遺物散布が知られる複合遺跡である。遺跡は在原神社（在原寺跡）を中心としてその範囲が推定されているが、これまでの調査において寺院跡に関わる遺構は未確認、未検出のままである。

今回の調査は、集合住宅建設に伴う事前の確認調査として実施したものであり、調査対象地の周辺においては西側で第４次調査（平成元年度）、西南方で第２次調査（昭和58年度）が実施されている。第２次調査では古墳前期の土坑から布留式土器の出土を初めて確認し、第４次調査では同時期の土坑、溝を検出し、当該期集落の北限を示すものと考えられていた。そのため今回の第５次調査地においても古墳前期遺構群の拡がりを確認することを第一の目的として調査を進めることにした。調査は対象地である石上町595－３・４番地の建物建設予定地に限定して調査区を設定したため南北２箇所のトレンチにより実施した。現地における調査は平成８年２月15日より開始し、同月27日にすべての作業を終了した。総調査面積は約250㎡であった。

図57　在原遺跡におけるこれまでの調査地点（S＝1／10000）　※数字は調査次数を表す

II　調査の概要

1．調査の経過

調査対象地は国道169号線に面して立地しており、敷地内における建物配置は東西方行に長い長屋風の建物を南北2箇所に配置する設計となっていた。そのため地下遺構に破壊がおよぶこれら建物の範囲に限った調査区を設定しそれぞれ北トレンチ、南トレンチとして調査を実施した。各トレンチはいずれも4m幅を基調としてそれぞれの調査を進めることにした。

2．北トレンチの調査

北トレンチでは北東から南西の方向に斜行する素掘り小溝群および小穴を検出している。遺物の出土は少なく時期の限定はできない状況であったが、すべて地山面直上で検出しており、現行条里にそぐわない在り方から中世以前と考えられる。層序は上部より第1層（耕作土）、第2層（床土）、第3層（にぶい黄褐～灰黄褐色砂礫混じり粘質土）、第4層（灰黄褐色細砂混じり粘質土）、第5層（明黄褐色粘土）となり、現地表面下0.3～0.7mの第3層が中世土器をわずか含む遺物包含層、0.8mの第5層が地山となっていた。遺物は前述の小溝群およびその覆土となる第4層より少量の布留式土器片が出土している。

3．南トレンチの調査

南トレンチでは中世の土坑、井戸、溝と重複関係からそれ以前と考えられる土坑、小穴をいずれも地山面の直上で検出している。南トレンチにおける層序は上部より第1層（耕作土）、第2層・第3層（床土）、第4層（灰黄褐色細砂混じり粘質土）、第5層（褐～暗灰黄色砂混じり粘土）となる。現地表面下0.4～0.6mの第4層は瓦器椀、皿、土師質羽釜、皿等の多くの中世土器片を含む遺物包含層であり、遺構検出面はほとんどが標高74.5m前後の第5層地山面直上である。

主要な検出遺構には**溝ＳＤ01**、**井戸ＳＥ01**等がある。いずれも瓦器、土師器と少量の陶磁器類が出土している。ほかにも時期不明の土坑、小穴や北トレンチの小溝群と同一方向に延びる溝が検出されているが遺物の出土が少なく浅く残りの悪い遺構がほとんどである。以下、前記の中世の遺構2基についてのみ詳述しておきたい。

溝ＳＤ01は南トレンチの南辺に沿うようなかたちで検出された溝状遺構である。ほぼ東西に延びる溝であり現行条里による区画割りに合った正方位を示す溝となっている。検出長は約4.7mであり東西の端部は後世の削平により失われたものと考えられる。幅約0.6m前後で断面形は浅い半円形を呈して深さ0.2mほどと残りは良くない。埋土は上部が褐灰～黒褐色粘土、下部が黄灰色砂混じり粘質土となっておりいずれもレンズ状に堆積していた。遺物はほとんどが埋土の上部に集中しており埋没過程にかかる時間幅を示すものと考えられる。遺物は瓦器椀、小皿、土師質羽釜、皿、灰釉陶器壺、産地不明の瓦質土器等が出土している。(図61：1～20)

井戸ＳＥ01は南トレンチ東端の遺構集中部に位置する横板組みの井戸枠をもつ井戸である。

径2m前後のほぼ円形の平面形を呈し、断面形状は二段掘り込みの漏斗状を成す。検出面より底面最下部までの深さは1.8mを測り、内部には検出面より約0.8mのところで横板組みの井戸枠が方形に組まれ、ここを境に下位では筒状に掘り込まれている。また、最下部の底面直上には拳大から人頭大の礫が置かれていた。井戸内の堆積状況は図60に示した通りであるが、土層図中の

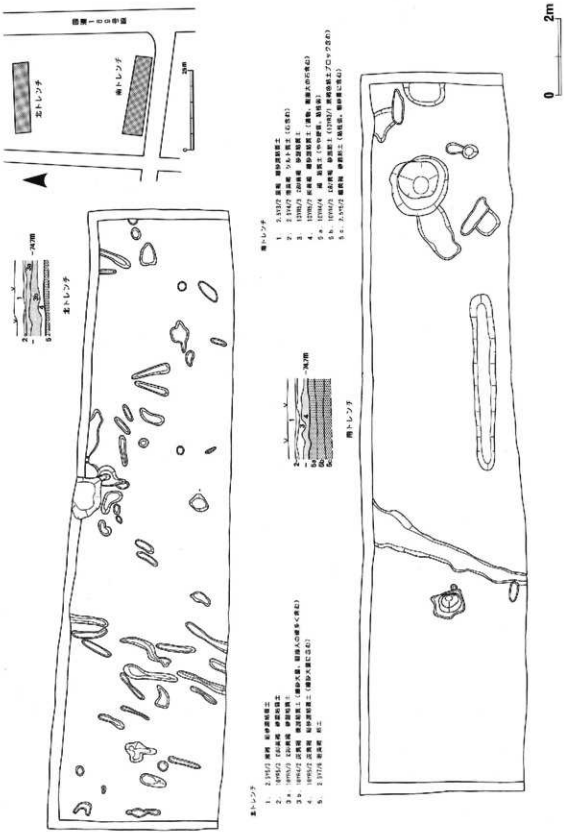


図58　調査トレンチ配置図（S＝1／1200）および各トレンチ平面・土層図（S＝1／100）

1～3を最上層、4～6を上層、7を中層、8を下層、9を最下層として遺物の取上げをおこなった。上層下部より中層上部では井戸枠に使用されたと思われる板材や井戸枠を筒部掘り込みに固定していた丸太杭等の残片が散乱し、上層より上位の堆積は人為的な埋立て行為によるものと考えられる状況であった。下層上位の方形横板組みの枠は下位には存在せず前記の上層下部の廃棄材が本来使用されていたものであろう。なお、横板組みの井戸枠については図示しなかったがその構造は板材の両端に凹形あるいは凸形の刳込みを作り出し、これを噛み合わせて方形にしたものであった。なお、上段掘り込みの周囲の井戸枠上部付近には縁辺に粘土を貼り付けた痕跡が残っていた。

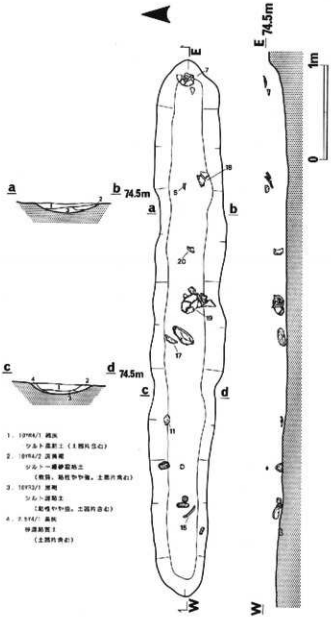


図59　溝SD－01　平面・土層図（S＝1／40）

4．出土遺物

溝ＳＤ01出土土器類

出土土器類には瓦器椀、皿、土師質皿、羽釜、灰釉陶器等がある。いずれも出土層位は概ね埋土上部が主体である。

瓦器は椀と皿が出土している。瓦器椀は底部内面の見込み暗文に平行線状のものと連結輪状のものとがある。どちらも成形後のミガキの幅は細く丁寧に施されている。また口縁端部に段をもっており、7のように口縁部の外反がはっきり見られるものがあり、いわゆる大和型瓦器椀である。また、ミガキや暗文を施す前に成形後、椀の内面を板状工具により平滑に仕上げることも窺われる。瓦器皿はすべて平行線状の暗文を施している。

土師質皿には小型のものと大型のものがある。小型のものの中には9のように口縁部が外反しているものもあるが、大半は内湾するか、まっすぐ延びるものである。

土師質羽釜は口縁端部を内側に折り丸くおさめ、鍔が胴部の最大径よりやや上に取り付く。菅原分類大和Ｂ２型（菅原1983）に類するものと

考えられる。

ほかに19のようなタタキによって成形された瓦質の土器があるが産地等は不明である。

20は灰釉陶器であり、壺または瓶子の底部である。

井戸ＳＥ01出土土器類

瓦器椀、皿、土師質皿・羽釜、土製品、輸入陶磁器、瓦が出土している。出土層位別には、21～24、26～34、55、80～89、100、102が埋土最上層、36～50、91～93、103が上層、51～54、56～79、94～99が中層、25、35が掘り方埋土である。

瓦器は井戸ＳＥ01の出土遺物の大半を占める。椀の形態は概ね大差はないが、口縁部のヨコナデのため強く外反するものもある。口縁端部を丸くおさめ内側に段をもつものがほとんどである。また38のように口縁の一部をつまみあげたものもある。高台は逆三角形を呈するものがほとんどであるが、逆台形のものもある。全体的に成形後、口縁部をヨコナデし、外面はミガキが施される。外面のミガキは全体を何分割かに分けて施され、口縁部に近いところを密に磨くものや、体部下半近くまで磨くものもある。ミガキが外面全体に施されていないため成形の指頭圧や指頭ナデも残る。内面は見込み近くまでに細かいミガキが丁寧に施されている。井戸ＳＥ01の瓦器椀も溝ＳＤ01の瓦器椀同様、成形後のミガキを施す前に板状工具によって内面を平滑にしているものが何点か見られる。内面見込みの暗文は平行線状と連結輪状の２種類があり、平行線状暗文には暗文

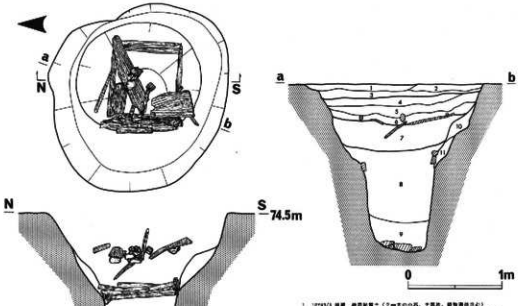


図60　井戸SE－01　平面・土層図（S＝1／40）

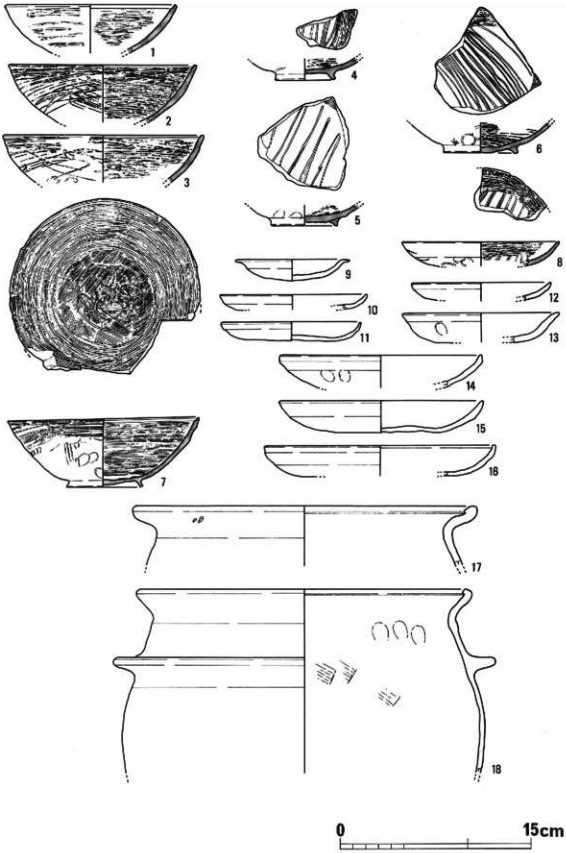


図61　南トレンチ　溝SD－01　出土土器類実測図1（S＝1／3）

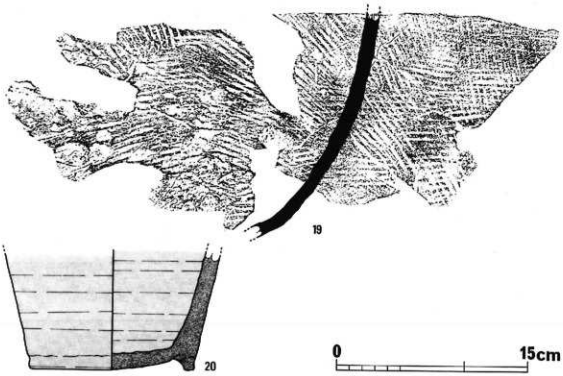


図62　南トレンチ　溝SD－01　出土土器類実測図2（S＝1／3）

の間隔が密なものとやや開くものがある。連結輪状暗文は５～６回転のものがほとんどである。瓦器皿は外面成形時の指頭圧とヨコナデを残し、内面は口縁部内側に丁寧なミガキを施している。また内面見込み部にはすべて平行線状暗文を施している。平行線状暗文は瓦器椀の暗文に比べてその間隔が密なものが多く、また一度に施されていないものも存在している。

土師質土器皿はＳＤ01同様大型と小型の２種類のサイズがある。どちらも指頭圧や指頭ナデによって成形され、その後口縁部にヨコナデを施している。

土師質土器羽釜は**93**の口縁端部を内側に折り曲げているものであり、溝ＳＤ01の**18**と同様の形態と考えられる。

100は不明土製品であり、側面にはみ出した粘土と底部と思われる部分の指頭圧痕から合わせ型のようなものを使用した型作りであると思われる。型で成形した後、指頭ナデにより外面が整えられている。側面に一箇所のみスタンプ状の圧痕が見られるが、これは成形時の型につけられていたものか、成形後につけられたものかは不明である。用途等は不明であるが、土人形の頭部が欠損した後、井戸廃絶時に祭祀的に埋納されたものかと思われる。

101は輸入白磁である。底部外面はやや上げ底状になっており、底部内面には沈線を有する。外底面は施釉されていない。森田・横田分類の白磁Ｖ類（森田・横田1978）に類するものと思われる。

102・103は瓦の小片である。前者は外面に網目の叩き痕、内面に布目痕を残す。

これら南トレンチで検出された溝ＳＤ01、井戸ＳＥ01の両遺構ともに出土している瓦器椀は形態・調整等に大差はないが、灰釉陶器等が出土していることから考えると、若干溝ＳＤ－01が時

期的に先行する可能性もあると考えられる。瓦器椀は近江編年Ⅰ―3期～Ⅰ―4期（近江1991）に属すると思われ、他の出土遺物等から考え合わせても今回出土した遺物は概ね12世紀前半から中頃にかけての範疇で捉えられるものである。（中山）

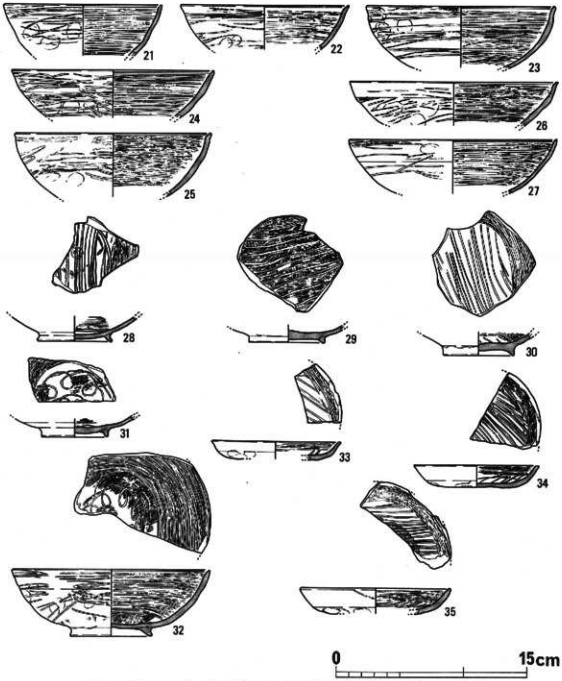


図63　南トレンチ　井戸SE－01　出土土器類実測図1（S＝1／3）

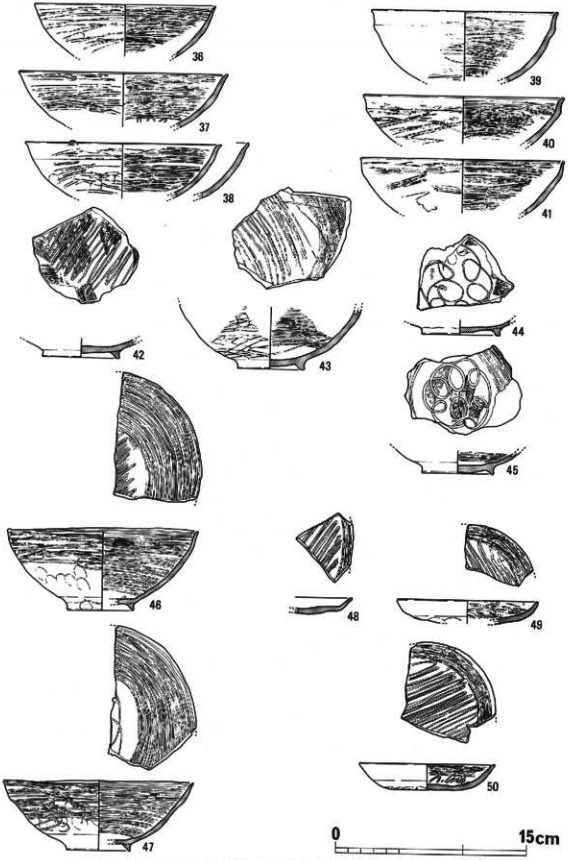


図64　南トレンチ　井戸SE－01　出土土器類実測図2（S＝1／3）

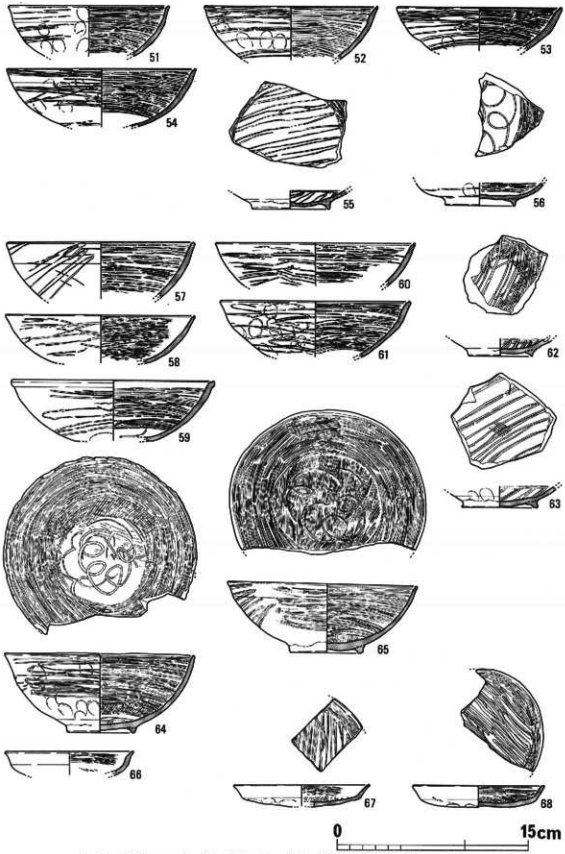


図65　南トレンチ　井戸SE－01　出土土器類実測図3（S＝1／3）

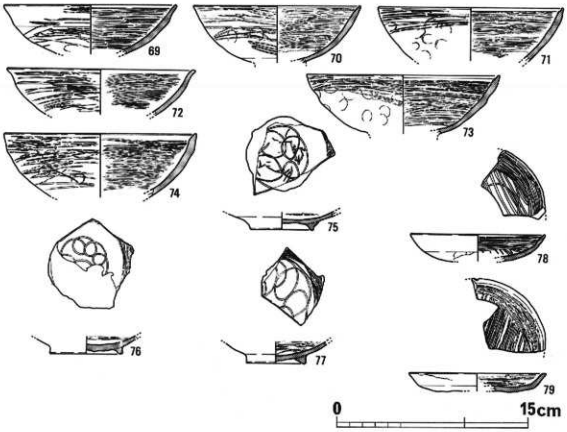


図66　南トレンチ　井戸SE－01　出土土器類実測図4（S＝1／3）

Ⅲ　まとめ

今回の第５次調査では当初より予想されたような古墳前期遺構群の拡がりを明瞭なかたちで確認することはできなかった。しかしながら、中世土器類を多量に含む**井戸SE01**、**溝SD01**を検出確認したことから、現在に第５次調査区西方に存在する石上町の村落が中世当時においては東側へ展開していたことが考えられた。南トレンチの**溝SD01**は第５次調査区南辺の東西道路にほぼ平行し、現状の条里とも合致するものであるため、おそらく12世紀前後の頃にはこの区画割りが成立していたのであろう。なお、北トレンチおよび南トレンチで検出されている斜行する小溝群については条里制区画以前の時期が考えられ、地形的な制約を受けた結果としての耕作痕とも思われる。遺物の出土が少ないため断定はできないが、当初の確認目的であった古墳前期集落に伴う生産領域であるかもしれない。

なお、今後は第５次調査地の北辺地域についても調査による確認作業を進める必要があろう。

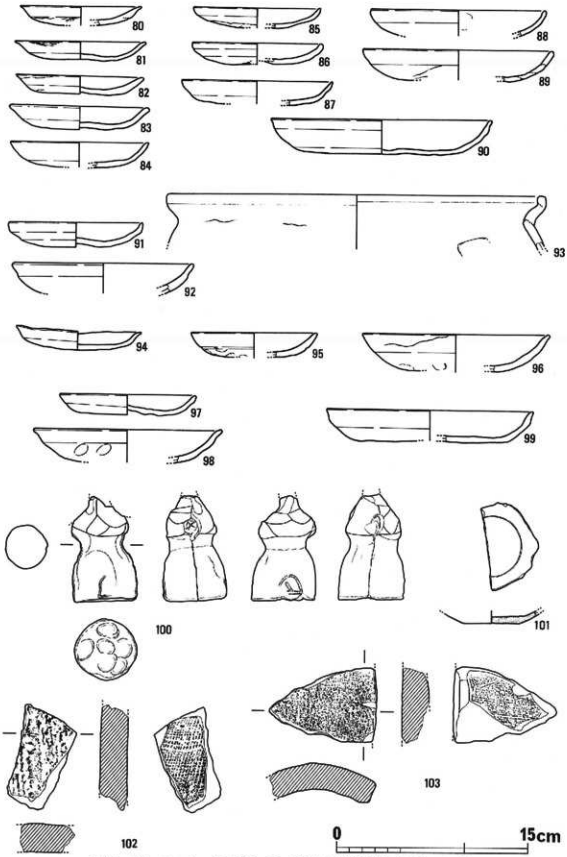
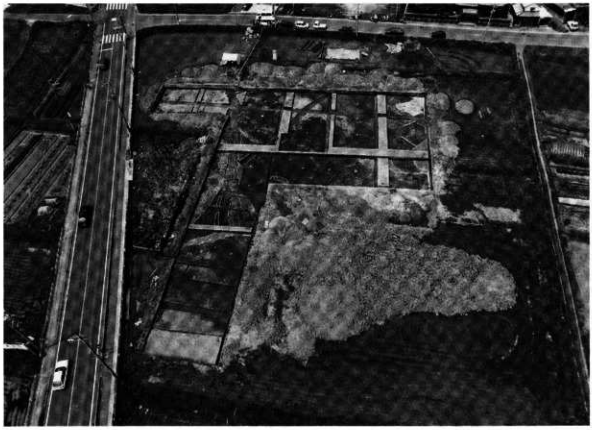


図67　南トレンチ　井戸SE－01　出土土器類実測図5（S＝1／3）

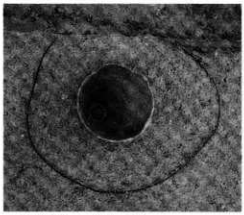
図

版

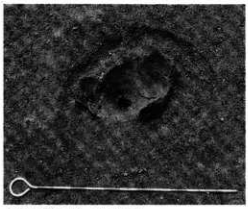
調査区全景（北から）



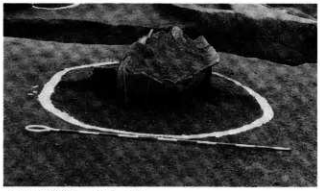
調査区全景（南から）



▲埋甕遺構1（南から）



▲埋甕遺構2（東から）



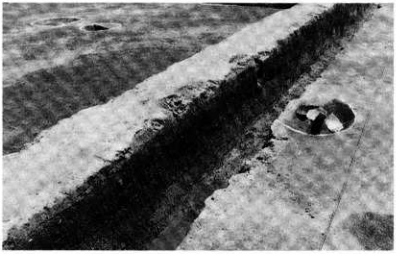
▲埋甕遺構3（西から）

▲SD401東岸土坑遺物出土状況（東から）

◀SX401遺物出土状況（北から）

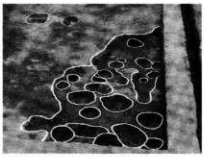
第1次調査地全景
調査前（南西から）▶

中央調査区西半南北アゼ
（6ライン）西壁土層断面
◀（南西から）

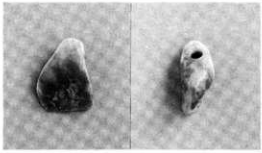


中央調査区西半東西アゼ
（Dライン）南壁土層断面
（南西から）▶

▲中央調査区住居状遺構1完掘状況（北西から）



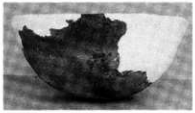
▲中央調査区住居状遺構2
完掘状況（西から）



▲硬玉製大珠

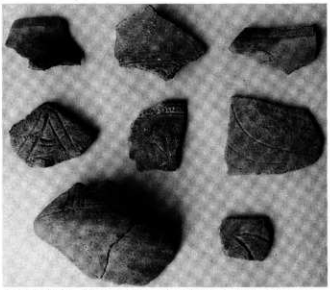
▲縄文土器　第Ⅱ群F2類（242）

▲縄文土器　第Ⅳ群C類（233）



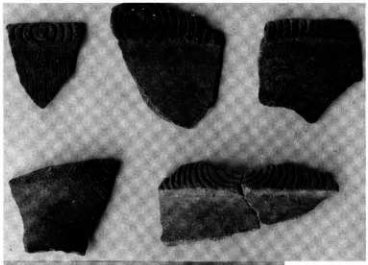
▲縄文土器　第Ⅱ群F2類（240）

▲縄文土器　第Ⅴ群A類（243）



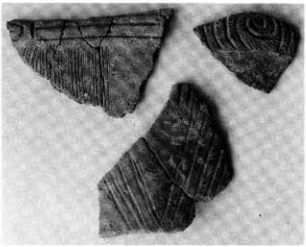
▲縄文土器　第Ⅰ群（上段左より206・186・79・211・197・372・249・327）

▲縄文土器　無文粗製（上48・下27）



◀縄文土器　第Ⅱ群A類
（上段左より90・92・108・74・247）

◀縄文土器　第Ⅱ群A類
（上段左より100・373・191・151）



▲縄文土器　第Ⅱ群B類（上段左より109・88・104）

▲縄文土器　第Ⅱ群D類（198）

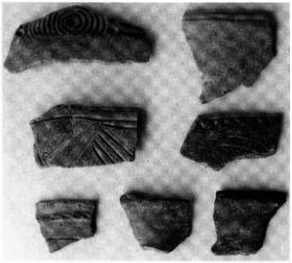
▲縄文土器　第Ⅱ群E類（71・65）

▲縄文土器　第Ⅱ群C類（120・123）

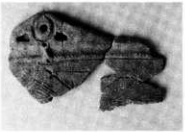
▲縄文土器　第Ⅱ群F類（237・135）

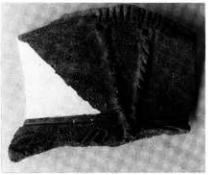
▲縄文土器　第Ⅲ群（356・210）

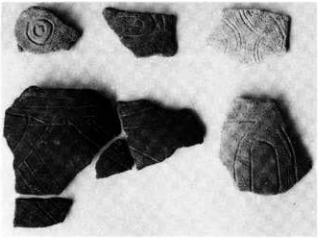
▲縄文土器　第Ⅳ群C類（246）



▲縄文土器　第Ⅳ群A類，B類，C類
（上段左より93・110・148・82・168・201・72）





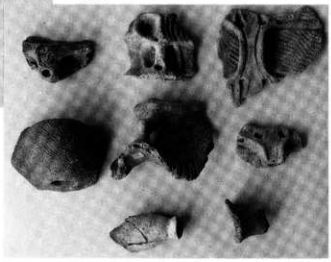


▲縄文土器　第Ⅳ群A類, B類, C類
（上段左より169・168・150・330・364・162・333）

▲縄文土器　第Ⅳ群A類
（上177・下176）

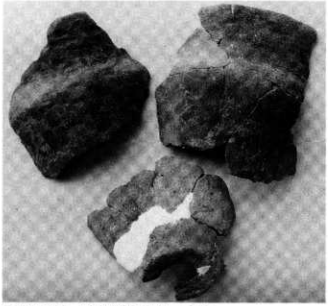
▲縄文土器　第Ⅴ群A類, B類
（上段左より155・361・171・152・203・218・209・149・244）

▼縄文土器　第Ⅳ群
（上段左より350・351・227・225・226・228・230・229）



▲縄文土器　埋甕遺構2出土（282）

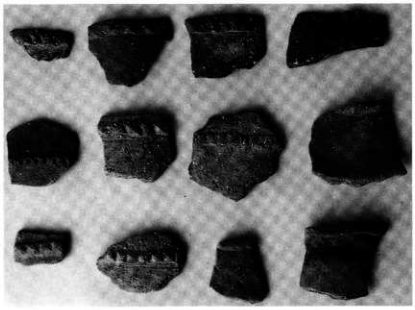
◀縄文土器　埋甕遺構1出土（278）



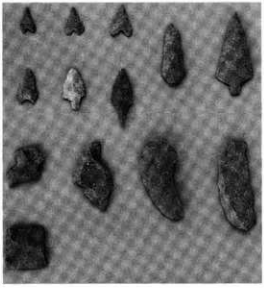
▲縄文土器　埋甕遺構3出土（279）

▲縄文土器　第Ⅳ群B類（280）

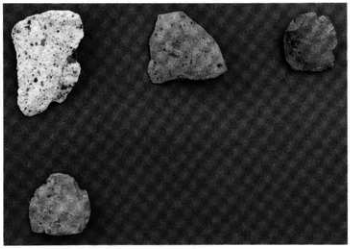
◀縄文土器　埋甕遺構1掘り方埋土（277）



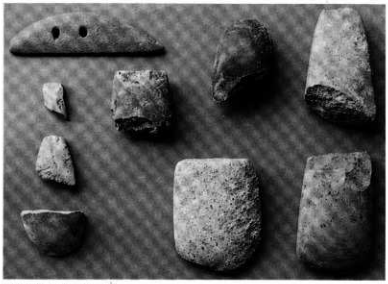
◀縄文晩期土器
(上段左より1・2・3・4・5・6・7・9・245・6・8・10・11)



▲打製石器　左表面，右裏面（21～33）

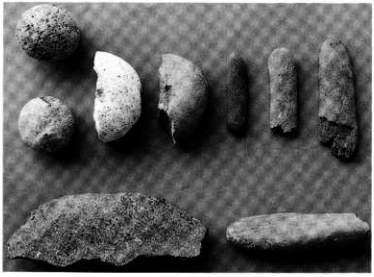


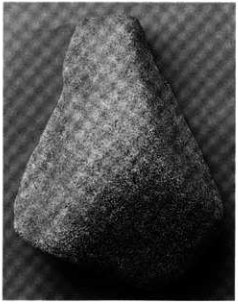
◀打製石器（34～37）



▲磨製石器（1～9）

▼磨製石器（10～18）





▲磨製石器（20）

◀磨製石器（19）

1．宮西遺跡調査地

2．鑵子塚古墳

1．第1トレンチ

2．第10トレンチ

1．第7トレンチ

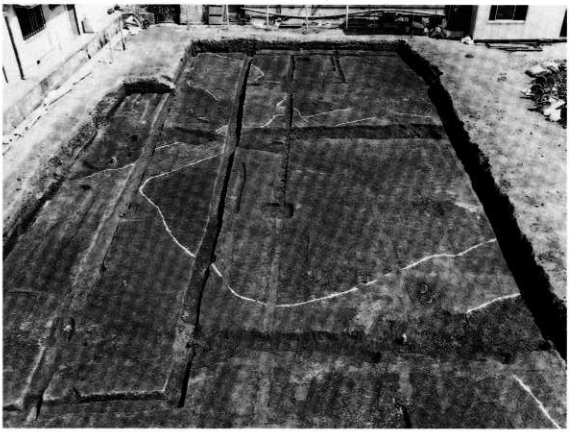
2．第7トレンチと鍾子塚古墳

1．馬口山古墳外観

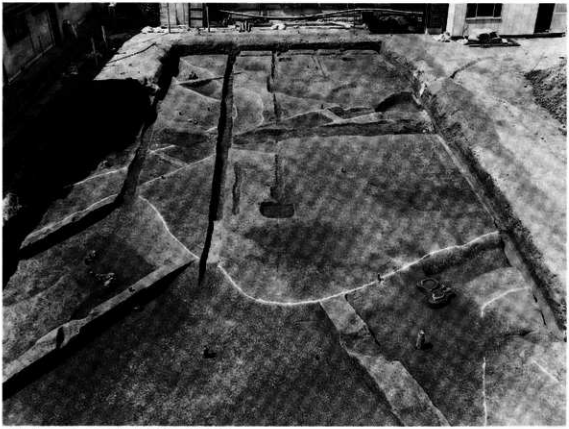
2．第1トレンチ

1．第2トレンチ

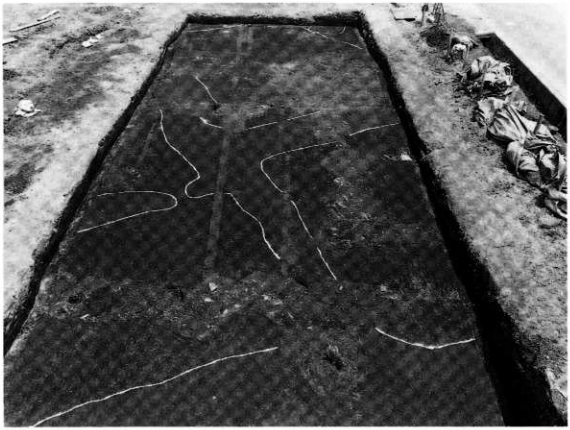
2．第3トレンチ



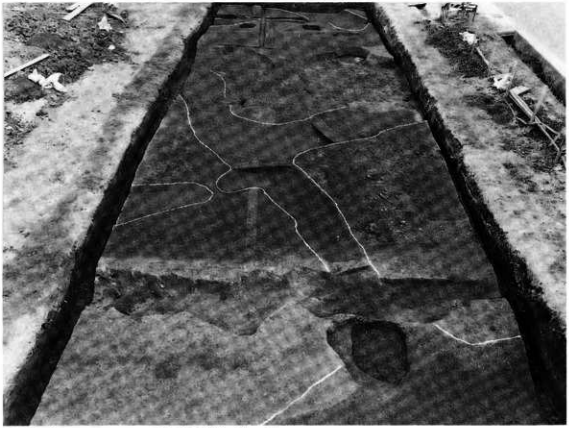
西調査区、遺構の検出（南から）



西調査区、１・２号方形周溝墓（南から）

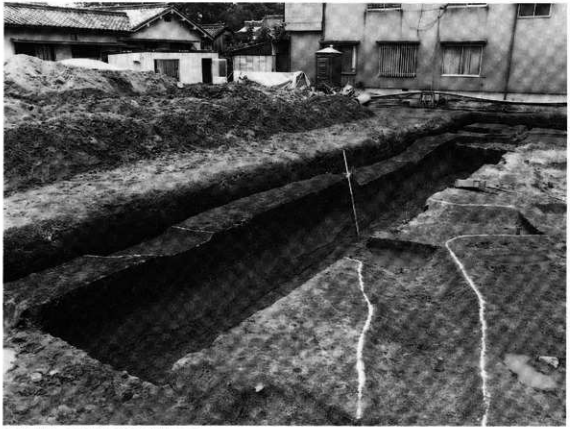


東調査区　遺構の検出（南から）



東調査区　1・3・4・5号方形周溝墓（南から）

東調査区　1・3・4・5号方形周溝墓（北から）



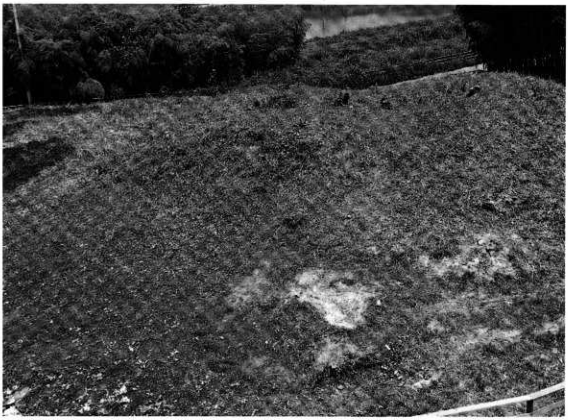
東調査区　立ち割り調査（南東から）

1号方形周溝墓の南溝
SD－04出土の土器
（東方から）

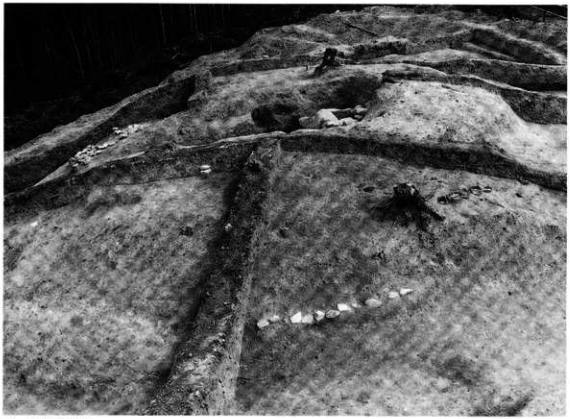
SD－04出土の土器
（西方から）

3号方形周溝墓の南溝
SD－09出土の土器
（南から）

SD－09出土の土器
（北から）



1．平尾山1号墳外観



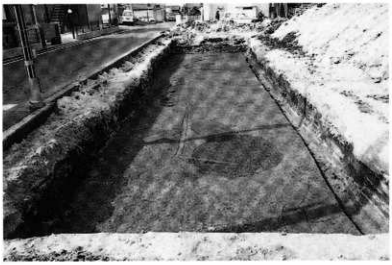
2．調査後墳丘

1．石室調査状況

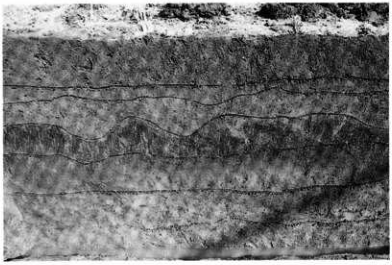
1．墳丘埴輪列

2．墳丘基底石列

南トレンチ
調査前全景
（西から）



南トレンチ
遺構検出状況
（東から）



南トレンチ北壁
土層断面
（南から）